

強度行動障害実践事例報告

食事関係 1

本人の状況

自閉症

コミュニケーション：言語なし。喃語、クレーン現象あり。簡単な指示の理解あり。

希望を通す為に激しい他害（頭突き・噛みつく・蹴る・引っかくなど）あり。

気持ちの切り替えに嘔吐あり。

問題とされた行動

「日中活動場面でルーチンとなった嘔吐」

当初は掴みかかりが多くみられたが、活動の最後にお菓子を食べるスケジュールを示した。掴みかかりは、支援の変更の初日に見られたものの、以後は見られなくなる。日中活動に参加するたび嘔吐し開始する行動に変化した。

取り組み経過

・データ収集

活動場所に来てから活動を終えるまでのおおまかな行動、活動の流れと職員が行った介入について時間軸に沿って客観的な記録をとった。

・状況の分析

【記録から見えてきたこと】

- ・嘔吐後に作業をはじめる。
- ・掴みかかることなどないことから、掴みかかりや希望が叶わないことからの気持ちの切り替えの嘔吐ではない。
- ・「嘔吐」「作業開始」の流れがルーチン化している。

【行動随伴性を考える】

(1) 支援開始時の状況

日中活動について、当初は活動時間や活動内容には拘らず、課題は行っても行わなくてもご本人のペースで最後にお菓子を食べて活動終了する形で行っていた。お菓子という好子を獲得するために強化されている行動と分析した(図1)。



(図1) 支援開始時の状況

(2) 支援変更後の状況

スケジュールカードを使い、「課題 休憩 課題 休憩 課題 お菓子」という活動内容の組み立てを行う。初日、活動に来てすぐにお菓子の訴えがあったが、希望が叶わないことで「掴みかかる・蹴る・頭突き」といった激しい行動が見られる。事前に決めておいた場面転換の場所（活動室の外、嘔吐しても良い場所）へ誘導する。「掴みかかる」「嘔吐」を数回繰り返した後、気持ちが

切り替わり課題を行うことが出来る。お菓子が手に入ることで強化されていた「掴みかかる」行動は、掴みかかったところでお菓子が手に入らないことから「消去」されていく（図2）。



（図2）支援変更後の状況

（3）支援変更後に定着した嘔吐

「掴みかかり」がなくなったと同時に、活動にやってくると毎回「嘔吐」してから課題を行うようになった。もともと気持ちの切り替えで行われていると考えられていた嘔吐は、以下のような随伴性により強化されてきた行動ではないかと考えられる（図3）。



（図3）嘔吐行動の強化

これが、掴みかかっても希望が叶わず、何をして良いか分からないような時、活動が提供されるという経験をした。



（図4）嘔吐行動と活動の提供

嘔吐後に提示された活動を行ってみたところ、すっきりした気分で活動に取り組むことができたという経験が、「嘔吐」「作業開始」というルーチンとして定着したものと考えられる。

・対応策

【嘔吐に変わる活動への提供】

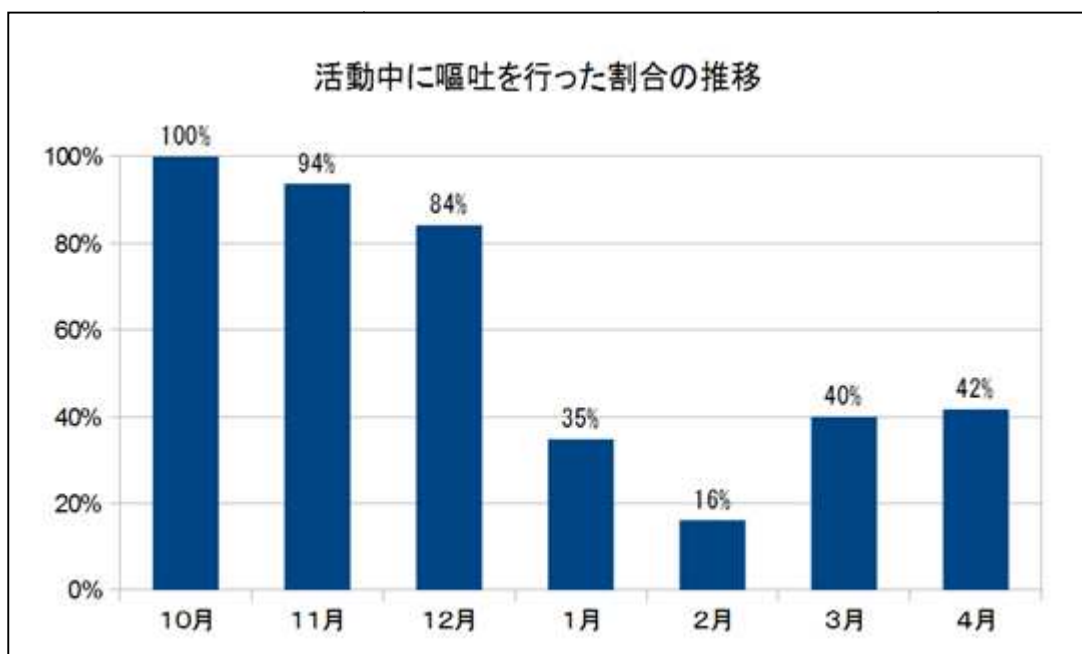
（1）ご本人が休憩時間中に好んで行っている音楽の鳴るおもちゃ（好子）を提示し、嘔吐前に入室を誘導した。

入室前の嘔吐はなくなるが、音楽を聴いた後に嘔吐してから作業を行う流れは残った。

（2）入室後、スケジュールボードの最初に「休憩」を設定。タイマーをきっかけに作業に促すという取り組みを始めた。嘔吐の減少を期待して、活動前の休憩時間には音楽を聴いてもらい気持ちを落ち着ける時間をとることとした。

・取組結果

入室後すぐにスケジュールボードを確認。休憩カードを見てソファに移動。音楽を聞きながら過ごす（その際にタイマー設定）。タイマーが鳴ると再びスケジュールボードを確認し、次の動き（作業）へ移る行動が確認された。嘔吐については、取り組み開始前と比べて大幅に減少していった。作業開始のきっかけとしてルーチンとなっていた嘔吐は「音楽を聴く」という行動に変化し消失した。体調不良時（花粉症時期）や4月の担当職員変更といった環境変化など、不安感が高まっていると思われるような時には嘔吐が見られるが、新しい環境に慣れていくことで消失している（図5）。



(図 5)

「嘔吐」という行動一つであってもその機能は時と場合により異なっている。完全な消失を目指すのは難しいことではあるが、様々な要因がどのように行動に影響を与えているのかを考察し、アプローチしていくことが必要である。このケースの場合は、コミュニケーションが難しいこともあり、不安解消の為に迷信行動を作りやすい傾向がある。理解しやすい指示、手掛かりを使って適切な行動を獲得し、安心感を増やしていくことが大切と思われる。現在、日中活動中の嘔吐は完全に消失している。

掲載日 平成 28 年 3 月 2 日

この文書の所管所属は津久井やまゆり園です。